

特集 大師道をゆく

江戸時代、日帰りできる川崎大師平間寺への参詣は、江戸の人々のレクリエーションの一つだったそうです。東海道を利用する旅人たちも、大師道を通して若宮八幡宮や川崎大師平間寺へお参りに行くなどして楽しんだそうです。NPO法人かわさき歴史ガイド協会にご協力いただいて、かつて多くの人々で賑わった参詣道、江戸時代の大師道を、往時に思いを馳せながら歩いてみました。

大師道

六郷の渡しから川崎宿に入り、まっすぐ行けば東海道、左に曲がると大師道。東海道との分岐点附近に、奈良茶飯が評判となり大変賑わっていた旅籠万年屋があり、その脇には「従是弘法大師江之道」と刻まれた道標がありました。大師参詣に向かう人々は、この道標を見て万年横丁を通り、医王寺の前を左折して直進、若宮八幡宮の横を通って松慶という店の脇から表参道へ出て、川崎大師平間寺の山門に至る「大師道」を歩いたのでした。

現在の大師道(大師新道)は、明治22(1889)年に川崎大師平間寺と地元の篤志家が、六郷橋のたもとから医王寺脇を経て大師駅までの自然堤防を土盛りして拡幅、整備した道です。この大師新道の上を、明治32(1899)年に東日本で最初の電車(大師電気鉄道)が走りました。

万年横丁

万年屋横から医王寺までの道は、雨が降るとぬかるんで悪路となってしまうため、天保10(1839)年に、万年屋の当主半七らが資金を出して道を整備しました。



江戸六郷領八幡塚村(現在の大師区)と川崎宿の間を結ぶ重要な渡船場

六郷の渡し



徳川家康が架けた六郷大橋は洪水で流され、以後、約200年の間、渡し船の時代が続きました。



左上) 東海道かわさき宿交流館にあるジオラマ
左下) 六郷橋欄干の渡し船のモニュメント
右上) 道標(現在は川崎大師平間寺の境内に保存されている)



今日の川崎市の基礎を作った功労者初代川崎市長 石井泰助氏の墓がある

徳泉寺



浄土真宗の寺院。昔、羽田にありましたが、寛永4(1627)年の多摩川の洪水で寺域が水没して川崎宿の江戸口近くに移り、さらに大正13(1924)年に六郷橋の架橋工事のため現在地に移りました。

医王寺



一つの実話と二つの民話がある天台宗の古刹

境内の梵鐘は、溝口水騒動のときに近隣の村々から村民を集めるために使ったといわれています。

萩坂昇さんの『かわさきのむかし話』には、鐘楼が火事に見舞われた際、いつも鐘の音で白鷺から命を守ってくれた恩返しに、池の多くの蟹が泡で炎上を防ぎ、背中が赤くなったという『背中の赤い蟹』や、村で子どもたちにできものが流行った時、浄めの塩を塗って溶けてしまった『塩で溶けた地藏さま』が載っています。

溝口水騒動 ニヶ領用水下流の川崎領の農民1万4千人余りが、当該用水を堰き止めたとして、稲毛領溝口村(現在の高津区)の名主 鈴木七右衛門宅を襲撃した事件。

上) 鐘楼と本堂 右下) 塩溶け地藏
左下) 二つの民話を読むことができる鉄製の絵本

「かなまら祭」「夏祭り」「水鳥の祭り」「ふいごまつり」など、年間を通して多くの催しが開かれる

若宮八幡宮



左) 社殿
中) 大師河原酒合戦記念碑
右) 九橋の遺構

御祭神の仁徳天皇は治水と干拓事業の神。応神天皇を祀る神社を八幡宮といい、その御子である仁徳天皇を祀る神社なので、若宮八幡宮というそうです。

境内には、茨城春朔一派が江戸から大師河原に乗り込み、迎え撃った池上幸広一派と三日三晩にわたり酒豪ぶりを競った史実を350年後の現代に再現した大師河原酒合戦記念碑があります。また、ニヶ領用水(大師堀)にかけられた九つの石橋(九橋)の遺構など、大師河原の歴史を伝えるものが数多く残っています。



元松慶(まつけい)があった場所には現在マンションがありません。かつての大師道のように、建物脇を通り抜けて表参道に出ることができます。

赤い布に想う人の名を書いて奉納すると結ばれるという

馬頭観音堂



昔の人は、この辺りで馬やかごを降りて、川崎大師の境内に入りお参りしたそうです。

力強い馬が手綱一本で格子につなぎ留められたことから、縁結びのご利益があるといわれています。



大師河原の開発をした池上家累代の墓所

池言坊



21代幸広は、新田開発のため、池上の土地(現東京都大田区)約7万坪他を池上本門寺に寄進して、大師河原に移住しました。

24代幸豊は、池上家の開拓精神を受け継ぎ、池上新田を開発しました。また、甘藷の栽培・砂糖の製造に成功し、果樹栽培や製塩などの殖産興業に貢献しました。

協力: NPO 法人かわさき歴史ガイド協会
東海道かわさき宿交流館